

防災意識向上を目的とした防災かるたの制作

Production of playing disaster prevention Karuta for the purpose of disaster management awareness-raising activities

山本 英和^{1*}, 熊谷 瞳¹

Hidekazu Yamamoto^{1*}, Hitomi Kumagai¹

¹ 岩手大学工学部

¹ Faculty of Engineering, Iwate University

平成 23 年東北地方太平洋沖地震の津波により岩手県宮城県沿岸部では多数の犠牲者を含む多大な被害が発生した。しかし、地域によっては津波の犠牲の割合が少ない場所も見受けられた。このような地域で共通していえることは、防災意識が高く、津波のハード対策を過信せず、防災教育や防災訓練などのソフト対策に力を入れ、かつ、その行動を継続してきたことが要因の一つとしてあげられる。しかし、防災教育の必要性が叫ばれてはいるが、誰が、誰を対象に、どのような手段で実施するのかの手引きがあるわけではない。特に、子供を対象とした、そのなかでも低学年の児童を対象に防災教育を継続して実施するためには自動に興味を持ち続けることができる教材の効果的な使用が望ましい。しかも、教科書や副読本のような受動的な教材よりも、体験型、行動型の教材が理想である。

本研究では、上記の立場に立って、防災意識を向上するきっかけとなりうるような教材、読むだけ見るだけではなく自分がからだを使って体験できる教材を開発することを目的に、防災かるたを制作した。防災かるたはこれまでも過去の震災の経験を風化させないため、防災意識向上のため様々な時代に各種機関で制作されてきた。しかし、現代らしくない表現を使用したもの、特定に地域の特徴が出すぎていて他の地域では利用するのが困難なものなどの問題点があり、それらを踏まえたうえで東日本大震災で新たに得られた知見を組み込んで岩手らしくかつ他地域でも使用可能なるたの制作を試みた。かるた制作では以下の点に注意した。自然災害ゆえの危機感をかるたが持つように、ただし、恐怖感、ショックを与えないように心がけた。具体的には、津波に巻き込まれるような表現を使用しないこと、バッドエンド(最悪の結末)表現を使用しないことなどである。絵柄は全ての人に受け止められる絵をめざした。色使いは緊迫感があっても温かみがあるようにした。配色は可能な限り全体の統一感を出すことを心がけた。制作した防災かるたを岩手県盛岡市のいくつかの児童館および学童保育で試してみた。かるた遊びの後に先生方や子供たちからかるたについての意見を聞いたところ以下に示す反応を得た。

- ・最後まで飽きさせることなくできた
- ・殆どの児童がかるたが好きだったので防災かるたは有効だと思う
- ・自ら学ぼうとする行動があり少しでも防災に興味を持たせることができたと思う
- ・かるたが防災に目を向けるきっかけになったと思う
- ・体験させることで絵や文章を印象付けることができた

謝辞

防災かるた制作は、平成 24 年度岩手大学工学部社会環境工学科 4 年生熊谷瞳さんの卒業研究の一部として実施されました。防災かるたのデザインは平成 24 年度岩手大学教育学部芸術文化課程 2 年生中山晴菜さん、立花未鶴瑛さん、浅野恵さんに協力していただいた。SSH 実習に参加した水沢高校の生徒のみなさんには読み札絵札の改訂にアドバイをいただきました。盛岡市内の児童館のみなさまにはかるたを試していただきました。記してここに謝意を表す。

キーワード: 防災教育, 防災教育教材, 防災意識啓発活動, かるた

Keywords: Disaster Prevention Education, Disaster Prevention Education Materials, Disaster prevention awareness-raising activities, Karuta